

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	伊藤廣之（京都府）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	乙第56号
学位授与の日付	平成29年3月2日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第6条
学位論文題目	「淀川における河川漁撈の環境民俗学的研究」
論文審査委員	主査 八木 透（佛教大学教授） 副査 植村 善博（佛教大学教授） 副査 篠原 徹（国立歴史民俗博物館名誉教授・琵琶湖博物館長）

〔1〕論文の概要

伊藤廣之氏の博士の学位請求論文である『淀川における河川漁撈の環境民俗学的研究』は、民俗学の新たな研究領域である「環境民俗学」という視座から、淀川を中心とした河川漁撈を題材として、これまでの河川漁撈研究の主たるテーマであった漁撈技術や漁具・漁法中心の研究から脱却し、漁撈の主体である川漁師の自然観や世界観の解明を目的としたこれまでに類を見ない研究成果である。新たな研究視角を前面に出しながら、民俗学における生業研究を新たな境地へと導く、きわめて斬新な民俗学研究であるといえよう。民俗学における河川漁撈研究を総括するとともに、これまでほぼ皆無であった淀川の漁撈を対象として、生業研究と環境民俗学双方の視座を組み合わせ、漁撈活動を「人の生」として位置づけ、漁撈活動を総体として捉えんとする視座から持論を展開した、非常にすぐれた論考である。なお本論文の目次構成は以下の通りである。

序 論

第1部 課題と方法

第1章 河川漁撈研究の課題

はじめに

第1節 民俗学における生業研究

第2節 戦前・戦後の河川漁撈の研究

第3節 近年の河川漁撈の研究動向

まとめ

第2章 環境民俗学の視点と河川漁撈研究の方法

はじめに

第1節 野本寛一と生態民俗学

- 第2節 篠原徹と民俗自然誌
- 第3節 鳥越皓之と環境民俗学
- 第4節 菅豊と人と環境の民俗学
- 第5節 環境民俗学の視点と本研究の枠組み
- 問題設定と研究方法

第2部 淀川における河川漁撈の展開

第3章 淀川の環境と河川漁撈の歴史的展開

はじめに

- 第1節 淀川の位置づけと研究史
- 第2節 淀川の環境
- 第3節 近世淀川の漁村と漁業
- 第4節 近代淀川の漁村と漁業
- 第5節 淀川における漁業組合史

まとめ

第4章 淀川淡水域における川漁師の河川漁撈

はじめに

- 第1節 川漁師Mさんのライフヒストリー
- 第2節 秘密の漁場
- 第3節 モンドリ漁と簀建て漁
- 第4節 投網漁
- 第5節 モズクガニ漁と民俗知識

まとめ

第5章 淀川淡水域と汽水域における川漁師の河川漁撈

はじめに

- 第1節 川漁師Aさんのライフヒストリー
- 第2節 可動堰上流域での漁撈活動と川漁師
- 第3節 汽水域への漁場移動と漁撈活動

まとめ

第6章 淀川河口域における河川漁撈と川漁師

はじめに

- 第1節 川辺のエコトーンと河川漁撈
- 第2節 淀川河口における漁撈活動
- 第3節 ウナギ漁と自然認識

まとめ

第3部 淀川における漁撈技術と川漁師の世界観

第7章 河川漁撈と遊水地漁撈

はじめに

- 第1節 淀川における河川漁撈と漁具漁法
- 第2節 巨椋池における漁撈と漁具漁法
- 第3節 河川と遊水地の漁撈比較

まとめ

第8章 漁場利用をめぐる慣習と漁場観

はじめに

第1節 漁場の個人占有と秘匿に関する研究史

第2節 川漁師による漁場の占有と秘匿

第3節 海の漁撈にみる漁場の占有と秘匿

第4節 漁場利用の類型と漁場の秘匿

まとめ

第9章 川漁師から見た淀川と自然観

はじめに

第1節 魚の居場所と動き

第2節 汽水の塩分濃度と魚の動き

第3節 漁場の秘匿と占有

第4節 河川に対する自然観

第5節 魚に対する自然観

まとめ

結 語

本論文の「序論」において、伊藤廣之氏は本研究の意義と目的について次のように述べている。「生業としての河川漁撈の研究を正面に据えて進めていこうとするのであれば、“人の生”としての河川漁撈とは何かを問わねばならないのである。本論文はこうした問題関心を出発点としながら、淀川でのフィールドワークで得られたデータに基づき、環境民俗学的視点に立ちながら淀川の川漁師の漁撈活動を分析し、河川漁撈を“生きる術”としてきた川漁師の漁撈観・漁場観・自然観などを明らかにし、民俗学における河川漁撈研究に新たな領域を切り拓いてゆくことを目的としている」。

この問題提起の通り、これまでの民俗学における河川漁撈研究では、漁具や漁法に焦点を当てた漁撈技術中心の研究が主流であり、川漁師というひとりの人間の生きざまや、人と河川という自然環境との繋がり等に関してはほとんど研究対象とされることはなかった。そのような中で伊藤氏は、これまでの生業研究の枠組みを、環境民俗学という視座を交えることによって質的に拡大させ、かつ新たな民俗学における生業論の構築を目指さんと試みている。具体的には、河川漁撈を検討してゆくために、漁撈活動の主体である川漁師の側に視点をおきつつ、「漁撈をめぐる三つの関係性」という独自の分析枠組みを提示している。その上で本論文の問題設定として次の三点を提示する。すなわち、①川漁師は魚・川・環境をどのように捉えていたか。これは自然観や環境観の問題である。②川漁師は他の川漁師たちとどのように渡り合って漁撈を行ってきたか。これは漁場やナワバリの問題であり、漁撈観の問題でもある。③環境変化の中で川漁師はどのようにして漁撈活動を行ってきたか。これは生き方や漁撈戦略の問題である。

以上のような三つの問題設定を基礎として、河川漁撈の主体である川漁師と魚、川漁師と川、川漁師と川漁師の関係性について精緻な分析を試み、これまでほとんど解明されることのなかった淀川水域の川漁師の自然観、環境観、漁撈観の解明を試みている。

ではここで本論文の内容を、章を追いながら紹介したい。第1章においては、最上孝敬・安室知・湯川洋司・野本寛一の生業論を取り上げ、民俗学における先学の生業研究を回顧しながら、その課題について検討を加えている。中でも河川漁撈を中心とした研究においては、従来の研究の到達点と課題について指摘しつつ、これまでの研究は漁具や漁法などの漁撈技術に関する研究は盛んにおこなわれてきたが、河川漁撈の主体である川漁師の存在にスポットを当てた研究は皆無に等しく、その実態がまったくといってよいほど解明されていないことを指摘している。

第2章においては、野本寛一の「生態民俗学」、篠原徹の「民俗自然誌」、鳥越皓之の「環境民俗学」、菅豊の「人と環境の民俗学」について紹介しながら、それぞれの学説の評価すべき点と問題点について明晰に整理し、結果として自らの論文では、菅豊が提唱したコモンズ論を用いた視点と、鳥越が提示した環境民俗学における視点をヒントにしながら、「自然と人の関係性」と環境を媒介とした「人と人の関係性」という視点を分析視角とすることを提唱する。さらに先述した「漁撈をめぐる三つの関係性」という独自の分析枠組みについて具体的に論述するとともに、本論文における3点の問題設定を提示している。

第3章においては、淀川の河川漁撈の背景として、フィールドである淀川環境と河川漁撈の歴史的展開、および漁業協同組合の実態について提示している。また近世における淀川河口と巨椋池の漁撈について先行研究を紐解きつつ、漁業の実態について明らかにしている。

第4章においては、淀川でモズクガニ漁を中心に漁撈活動を行ってきた川漁師のM氏の具体的な漁業のあり方について詳述する。聞き書き調査と実際の漁撈調査に基づいて、可動堰上流の淡水域で漁業を行ってきたM氏のライフヒストリーを示している。中でも、漁場の一種としてセンタ・ヨコアナとよばれる秘密の漁場の存在を明らかにしたことは大きな成果であったと考えられる。

第5章においては、大正後期から昭和末期にかけて漁撈活動を行ってきた川漁師のA氏のライフヒストリーを示しながら、その漁業のあり方について詳述する。特に1960年頃に淀川の河川環境が著しく悪化したことにより、漁場の移転を余儀なくされたA氏の移転前と移転後の漁撈活動の詳細を提示しつつ、環境民俗学の視座から、環境を媒介とした「人と人の関係性」と「自然と人の関係性」に着目して漁撈活動を分析している。

第6章においては、大阪市西淀川区福で生まれ育ち、若い時から漁撈活動を行ってきた川漁師のT氏の漁業のあり方について取り上げている。中でも淀川河口域における汽水の具体的な漁撈活動について詳述している。

第7章においては、淀川の河川漁撈と水系内最大の遊水地である巨椋池の漁撈との比較を通して、淀川河川漁撈の技術的特質について詳述する。また両者の漁師の環境認識、漁具や漁法、漁撈知識等に関して、漁撈の共通点と相違点について分析し、相対的に淀川河川漁撈の特質を明らかにしている。

第8章においては、淀川の川漁師による漁場占有の慣習を、海洋漁撈における漁場占有の慣習との比較を試みながら検討し、それらの背景にある占有の原理を明らかにしている。またこれまでほとんど注目されることがなかった「秘密の漁場」について詳細な分析を行い、川漁師の漁場利用の実態について独自の視座から分析を行っている。

第9章においては、淀川の川漁師の漁撈活動の分析を通して、漁撈活動の主体である川

漁師の自然に対する認識を明らかにする。さらに魚と漁場に関わる要素を検討しながら、魚に関してはその居場所と動きという要素にわかれることを指摘し、さらにそれらは河川の地形や水の流れ、風向きや潮の干満という自然の要素が深く関わることを指摘している。また漁場に関しては、漁撈の上でお互いに競い合っている他の川漁師という要素と繋がっていることを指摘している。

結語においては、論文全体を振り返りながら、各章での論点を整理しつつ、第2章で提示した三つの問題設定と照合し、何をどこまで明らかにできたかについて改めて整理を試みている。すなわち、「①川漁師は魚・川・環境をどのように捉えていたか。これは自然観や環境観の問題である。②川漁師は他の川漁師たちとどのように渡り合って漁撈を行ってきたか。これは漁場やナワバリの問題であり、漁撈観の問題でもある。③環境変化の中で川漁師はどのようにして漁撈活動を続けてきたか。これは生き方や漁撈戦略の問題である」とする3点について、まず①の問題については、川漁師は魚に対してひとつの意思を持った生き物とみなし、並立した対等な位置関係にあるものとして接する自然観を有していたこと。さらに川漁師は川の中に特別な漁の穴場を有し、それを大切な空間として捉える環境観を有していたことを指摘する。②の問題については、川漁師はお互いに占有権を認め合うというルールに則って漁を行う一方で、自分だけの秘密の漁場を隠し持ちつつ、他の川漁師の秘密の漁場を盗むという、二面性をもった漁場利用に川漁師の漁場観が現れていることを指摘する。③の問題については、環境変化の中で川漁師たちはさまざまな挑戦を試みながら、河川漁撈を生業として維持してきた川漁師の漁撈戦略について指摘する。また最後に、今後の研究の課題を明示して論を閉じている。

〔2〕 審査結果の要旨

本論文が民俗学の生業研究、特に河川漁撈を対象とした研究の潮流からして、斬新かつ独創的だと思われるのは、基本的に以下の3点においてであると考えられる。

第1点として、これまでほとんど明らかにされることがなかった淀川流域の淡水域から河口域までの河川漁撈の実態について解明したことは、学史の上からも非常に大きな意義があるといえる。しかも従来の漁撈研究の主流であった、漁具や漁法を中心とした技術中心の研究から、環境民俗学という視座を交えることによって大きく脱却し、新たな生業研究の領域を開拓したことは特筆に値するといえよう。

第2点として、それぞれ異なった経験を有し、若干異質な漁場において漁撈活動を続けてきた3名の川漁師のライフヒストリーを明示したことは、漁撈の実態を明らかにしたことに加えて、「生きるための生業」としての漁業に従事した人間の生きざまを克明に浮かび上がらせたことは、民俗学の研究方法上から見ても大きな意義を有するものといえる。また実際の川漁師の漁撈活動を明示することによって論に説得力を与え、論文の実証性を大いに増すことに繋がったのではないと思われる。

第3点として、環境民俗学という視座から河川漁撈を総体的に捉えることによって、川漁師から見た魚や川、あるいは漁場のナワバリ、川漁師間の関係性等、これまでほとんど知られることのなかった川漁師の世界観を浮き彫りにすることができたと思われる。その結果として、漁撈活動の背後にある川漁師の自然観、漁場観、漁撈観等を明らかにしたこ

とは、きわめて大きな意義を有する研究だということができる。

次に審査者が感じた本論文における問題点と課題についても触れておきたい。以下の点に関して、今後の十分な検討を希望したい。

まず、本論文中には地図等の図表が何点か掲示されてはいるが、広域の河川流域を扱い、また川漁師の住む村落も広域に及ぶことから、もっと詳細な地図があった方が対象となる漁場や、川漁師が住む村落と河川との位置関係をより明確に示すことができたのではないかとと思われる。たとえば詳細な地形図を用いて、河川の位置や漁場のポイント、あるいは川漁師の出身村落等を書き込んでゆくことで、対象地域をより正確に示せたのではないだろうか。

また、本論文の対象とされる旧巨椋池から淀川河口までの地域は、「琵琶湖・淀川流域」として一括りに捉えられる水域である。その点から考えれば、この地域の漁業については琵琶湖の漁撈活動を抜きにして語ることはできないといえるだろう。そのためには、民俗学の重要な視座である歴史民俗学的なアプローチも必要だと思われるが、本論文ではその点がやや弱いように思われる。さらに、本論文によって明らかになった事柄をより普遍化させるためには、他地域の河川漁撈との比較検討が必須であろう。これまである程度の蓄積がある関東の河川漁撈との比較を行うことによって、淀川河川漁撈の特質がより鮮明になるものといえよう。

また、本論文で取り上げられている3名の川漁師の出身村落における立場や、村落内で農業等の他生業に従事する人たちとの関係性についてはほとんど触れられていないことも問題だといえる。淀川河川漁撈に携わる漁師たちが住む村落は、ほとんどが農村であるかあるいは町場に近い地域であり、漁村といえる村落は皆無であろう。ならばそのような村落内において、川漁師がいかなる立場にあり、村人たちとどのような繋がりを有してきたかについては、「生業としての河川漁業」の実態を考える上で必要ではないだろうか。

さらに、漁業は魚を採る漁師と魚を漁師から買い取って消費者に売る業者と、さらに消費者という3者の関係によって成り立つ生業である。ならば川漁師がどのような業者にいくらで魚を卸し、また都市の消費者はいかなる魚を需要していたのか、いわゆる魚の流通全体の構造についても分析の対象とする必要があると考えるべきである。本論文中には、魚を取り扱う仲買人と魚の価格を示した箇所が見られるが、流通の全体構造を示せているとはいえない。この点も今後の課題であるといえるだろう。

以上の通り、本論文には問題点もないわけではない。しかし、総じて明確な問題意識に基づき、未知のフィールドにおける河川漁撈の実態について、丁寧かつ緻密な考察と分析、および新たな生業論の展開に至るまで、豊富なフィールドワークの経験と豊かな知見に裏づけされた論考であることは疑う余地がない。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断する。